様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月 ２２ 日現在

機関番号：３２５１０
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2014～2015
課題番号：２６８７０５５４

研究課題名（和文）アイヌ近現代思想史の構築：近代性を軸とする歴史的・理論的研究

研究課題名（英文）Constructing a Modern and Contemporary Ainu Intellectual History

研究代表者
ＷＩＮＣＨＥＳＴＥＲ　Ｍａｒｋ（WINCHESTER, Mark）

神田外語大学・付置研究所・講師

研究者番号：２０５４７５８３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、下記の３点を考察の軸として、アイヌ民族の近現代思想史の全体像に迫ることを目標とした。（１）近現代におけるアイヌ思想史の系譜構築の必要性、（２）アイヌ近現代思想史の日本思想史研究上の意義、（３）世界規模の社会的かつ歴史的、または哲学的な思想課題としてのアイヌ近現代思想史。２６年度では、書籍などからの基礎的情報と研究上に必要なIT関連機器の補充的整備や、研究対象となる著述家の自筆原稿などの資料調査を行い、２７年度では、さらに資料調査を重ね、論文の出版や研究成果の発表を行なった。

研究成果の概要（英文）：The aim of this project was to develop an overall perspective on the modern and contemporary intellectual history of the Ainu people. The project was organised around three axes of consideration: (1) The need to construct a genealogy of modern and contemporary Ainu intellectual history, (2) The significance of Ainu modern and contemporary intellectual history for Japanese intellectual history research, and (3) Presenting Ainu modern and contemporary intellectual history as a challenge for social, historical and philosophical thought on a global scale. During the 2014 academic year preparatory and fundamental information needed for this research was collected and supplemental IT related equipment required for the research was assembled. A research trip was also made in order to study the original manuscripts of writers of specific interest to the study. In 2015, further research material gathering trips were made and the presentation and publication of the results of the research began.

研究分野：アイヌ研究・思想史

キーワード：アイヌ　アイヌ思想史　近代　思想史

１．研究開始当初の背景

(1)「先住民族の権利に関する国際連合宣言」が 2007 年秋に採択されて以来、日本国内において新たな対アイヌ政策の制定に向けた動きが推進されてきた。広く言えば、これは世界各国にも見て取れるかつての対先住民族政策への反省過程として捉えることができる。一方では、アイヌの「民族性」が現在の政治的意図によって「人為的に作られている」ものだと否定し、日本の近代の対アイヌ政策において「差別の解消と同化の達成は裏表一体だった」と主張する反動的な歴史修正主義も、これらの動きに対する直接的なバックラッシュとして現れてきた。戦後アイヌ史研究が「同化」対「復権・抵抗」、あるいは「客体的なアイヌ史」対「主体的なアイヌ史」といった二項対立に依拠してきたあまり、複雑な植民地主義の歴史を記述する作業が歴史修正主義者に任せてしまった側面も否定できない。本研究は、アイヌに関わる現在のこの社会状況と相互影響的に並行している、アイヌに関わる研究上のジレンマに取りかかるものとして構想された。

(2) 研究代表者は、大学院進学以降、一貫してアイヌ研究が持つ現代的な意味を問い直す作業に当たってきたのであり、1970 年代に活躍していたアイヌの詩人と批評家の研究、現在の新しい対アイヌ政策の制定過程と方向性に関する研究、アイヌ史にまつわる歴史修正主義の問題に関する研究などを行なってきた。また、本研究のもう一つの重要な考察の柱である第２次世界大戦中のアイヌの戦時体験をめぐる研究論文もある。本研究は研究代表者のこれまでのこの研究蓄積を活かしつつ、より大きな包括的視野をアイヌ研究と日本思想史研究に提供することを目的とし、アイヌの著述家や知識人たちがいかに世界規模の思想課題を浮き彫りにしたかを模索することによって、当該分野に独創的な成果をもたらすことを目指した。

２．研究の目的

(1) 本研究の目的は、アイヌの近現代の思想史を構築することであった。従って、本研究は、近現代日本におけるアイヌの著述家や知識人たちが近代世界に自らが組み込まれているのだという感覚について発言してきたこと、あるいはそこから得られる知見を、近代性（modernity）に関する国内外の思想史研究の考察の中へと導入し、日本及び近代をアイヌの立場から相対化するという意味ではなく、この周縁化された知見こそが近代を考える上でどうしても抜かしてはならない要の部分を構成していることを明らかにし、日本という地域に留まることなく、海外の研究状況と結びつけることで、世界史そのものに対する理解に大きく貢献することを目的とした。

(2) これまでの「同化」対「抵抗」といった二項対立的なパラダイムに全面的な強制力を帰属させるかわりに、取り返しがつかない形でアイヌが近・現代社会の構成員になっただけではなく、とき同じ近・現代社会の擁護者として、そしてときにその最も鋭い批判者として貢献してきた事実に本研究は注目した。本研究は次の 3 つについての考察を柱として、アイヌ近現代思想史の全体像に迫ることを目標とした。

① <u>近現代におけるアイヌ思想史の系譜構築。</u>蝦夷地の内国化から現在までを「近現代」の一画期として、同時代のアイヌの著述家や知識人たちの思想の系譜を構築し、そこから得られる知見を繰り上げて考察していく。

② <u>アイヌ近現代史の日本思想史研究上の意義。</u>①の成果を踏まえつつ、近現代におけるアイヌに対する差別及びアイヌの社会的差異化の問題が日本における近代性にとっていかに不可欠だったのかを明らかにし、日本近現代思想史研究において軽視されてきたアイヌの著述家の知的作業が日本における「近代」を考える上でどうしても抜かしてはならないのだという事実を明確にしていく。

③ <u>世界規模の思想課題としてのアイヌ近現代思想史の提示</u>。近代的権力の連接の決定的な地点において生産されてきた人々同士のあいだに存在する、ある絡み合いを示しているものとして、自らが周縁化された存在として近代世界に組み込まれているのだという感覚が挙げられる。世界各国において、このような経験に対する考察は黒人思想史、ユダヤ人思想史、その他のマイノリティ研究やポストコロニアル研究として展開されてきた。こうした海外との研究状況と結びつけることで、本研究はアイヌ研究から世界に提示できる思想の課題を追究していく。

３．研究の方法

(1) 本研究の基礎課題を追究していくためには、これまで研究代表者が研究を進める上で確立してきた研究ネットワークを利用しながら次の具体的な研究計画を遂行してきた。研究計画は 5 点からなった。①３回の北海道現地調査と資料収集を行い、②アイヌ研究及び日本思想史研究やそのたの思想史研究の海外研究者を招聘したワークショップを組み、③日本思想史研究、または世界の思想史研究のあり様をすでに再考している国内外の研究者との研究打ち合わせで本研究の課題と意義を模索し成果を共有し、④成果報告を行い、⑤論文として研究成果発表を行なっていくものだった。

４．研究成果

(1) 平成 26 年度には、「研究の目的」の(2)

①に挙げた近現代におけるアイヌ思想史の系譜構築のために、バチェラー八重子、砂沢市太郎、荒井源次郎、違星北斗、森竹竹市、知里幸恵、山本多助、貫塩喜蔵、 知里真志保という戦間期世代を初め、高橋真、上西晴治、砂沢ビッキ、鳩沢佐美夫、平村芳美、戸塚美波子、佐々木昌雄ほか戦後世代のアイヌの著述家や知識人たち、なるべく多種多様な文脈において活躍していた人々の著作の基礎的整備と再検討作業を中心に研究を進めた。また 1 度目の北海道現地調査を実施し、研究対象となる著述家の自筆原稿の閲覧を行なった。なお、本研究とは直接的な成果ではないが、研究開始当初の背景に挙げた歴史修正主義の問題に関しては、平成 26 年度では『アイヌ民族否定論に抗する』（河出書房新社）という共編著を出版した。

(2) 平成 27 年度には、研究計画上の２度目と３度目の北海道現地調査または研究打ち合わせを行い、拙著論文「移民と先住民のあいだ」の主要テーマをさらに掘り下げる形で、平成 26 年度に得られた知見を、今度はアイヌの戦時体験についての文献資料から再考していくことを試みた。荒井源次郎、山本多助、中本俊二、弟子豊治と浦川玉治などというこれまでの数少ないアイヌの戦時体験の証言者をまとめて検討する作業を行い、アイヌ近現代思想史における究極な近代経験としての戦争体験の持つ意味を模索する論文は現在準備中である。

(3) 「研究の目的」(1)に挙げた海外の研究状況と結びつけることに関しては、平成 27 年度には、カリフォルニア大学サンタバーバラ校 Department of East Asian Languages and Cultural Studies のアンエリス・ルワレン助教授（近代日本文化研究・先住民族研究）に招待され、本研究の研究成果を同大学の Interdisciplinary Humanities Center による Reinventing Japan 招待講演会及び大学セミナールにおいて発表することができた。

(4) 本研究の着想に至った経緯には、一方では黒人思想史研究の方法論的展開を近年において繰り上げてきた英国のポール・ギルロイや、南アフリカ共和国のアキーユ・ムベンベからの刺激があり、米国の政治哲学・社会理論家であるスーザン・バック＝モースによるハイチ革命の哲学史での意味あいと、特異な状況から普遍的な歴史学の可能性を再検討する研究からのインスピレーションもあり、これらと近代主義とその批判と抵抗をよりよく理解するために現代思想研究における時間哲学の新展開との関係、またはそれが持つアイヌ思想史研究と日本思想史研究にとっての意味を、研究代表者はかつて拙著論考「メシア的普遍」において模索した。「研究の目的」の(2)③に挙げた世界規模の思想課題としてのアイヌ近現代思想史の提示として、平成 27 年度には、これらの研究課題との接点をさらに理論的に発展させた日本語論文「『人間と呼ばれるものへの抗排であるように』：佐々木昌雄とアイヌ近現代思想史における贖いの政治」（『神田外語大学日本研究所紀要』第７号、58–93 頁）を研究成果発表として出版した。この論文の続編は 2017 年に発行される『神田外語大学日本研究所』第 9 号に掲載する予定である。

(5) 研究開始当初に予期していなかった事象として、「研究の方法」(1)②の海外研究者を招聘したワークショップが参加予定者の都合によりプロジェクト期間中に実現できなったことが、特に本研究の「研究の目的」(2)③の実現に大きな障害をもたらしたが、研究代表者は本研究が引き続き現在進行中のものと考えており、近い将来に開催する予定である。

＜引用文献＞

① ウィンチェスター　マーク、岡和田　晃、河出書房新社、アイヌ民族否定論に抗する、2015、336
② ウィンチェスター　マーク 他、有信堂、移民と先住民のあいだ、移動という経験：日本における「移民」研究の課題、2013、137-162
③ ウィンチェスター　マーク、メシア的普遍、現代思想、査読無、38-3、2010、246

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　１件）

<u>ウィンチェスター　マーク</u>、「人間と呼ばれるものへの抗排であるように」：佐々木昌雄とアイヌ近現代思想史における贖いの政治、神田外語大学日本研究所紀要、査読無、第 7 号、2015、58-93、

http://id.nii.ac.jp/1092/00001280/

〔学会発表〕（計　　件）

〔図書〕（計　　件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
ウィンチェスター　マーク（WINCHESTER, Mark）
神田外語大学・日本研究所・専任講師
　研究者番号：２０５４７５８３

(2)研究分担者
（　　）

　研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

　研究者番号：